

春の特別企画展

# 家持の二上山

玉くしげ二上山に鳴く鳥の

声の恋しき時は来にけり

高岡市万葉歴史館

会期：平成16年4月21日(水)～5月10日(月)

# 大和の二上山

奈良と大阪の境に位置する二上山は、標高五一メートルの雄岳と四七四メートルの雌岳の二峰からなる。その峠は、古来より大和と河内を結ぶ交通の要所で、山頂からは、奈良、大阪、遠く淡路島まで望むことができる。大伴家持が防人の歌を採集した難波宮も眺望できたことであろう。万葉集では、「おし照る難波宮」とこの宮の繁栄を讚美したが、この表現の生まれた背景には、二上山からの美しい眺望があるともいわれている。

雄岳の山麓には大津皇子の墓がある。大津皇子は、天武天皇の第三皇子に生まれたが、勇敢で聡明な資質のため謀反の嫌疑をかけられ、六八六年、天皇の死後わずか一カ月にして、非業の死をとげた。弱冠二十四歳であった。皇太子草壁皇子と持統天皇の策謀によると見られている。皇子の死を悲しんだ姉の大伯皇女の、次の万葉歌は有名である。

うつろみの 人なる吾や 明日よりは  
二上山と 弟背と吾が見む

(巻二・一六五)

「現世に生きる人である私。だから明日からは二上山を愛しい亡き弟として私は眺めるしかない」。亡き弟のよすがとして、大伯皇女は、日々二上山を眺め続けたことであろう。二上山に沈む夕陽は、他界を観想させるものとして、後世に引き継がれていく。

## ■折口信夫「死者の書」の世界

小説「死者の書」は、国文学者で民俗学者、歌人でもある折口信夫（釈迦空）の作品で、昭和十四年に雑誌『日本評論』に発表。同十八年、青磁社より単行本として出版された。舞台は古代大和国。大津皇子をモデルとした滋賀津彦が二上山の暗い石棺の中で甦るところから話が始まる。この作品のヒロインである藤原南家郎女（中将姫）は神隱しにあり、二上山の麓の当麻寺で発見される。そして、二人の魂は、彼岸の日、二上山に沈む夕陽の中、めぐり逢う。作品の中には、兵部大輔時代の大伴家持も登場。昔を偲び、伝統を好む貴公子として描かれている。神秘的で難解な小説として知られるが、折口の学問と文学的感性によって生み出された日本近代小説の最高の成果とも評される。生涯独身だった折口は、弟子の石川県羽咋市出身の藤井春洋を最も愛し、養子として迎えるが、春洋は昭和十九年に硫黄島にて戦死。折口は能登の気多大社近くの海辺に父子墓を建て、共に眠る。

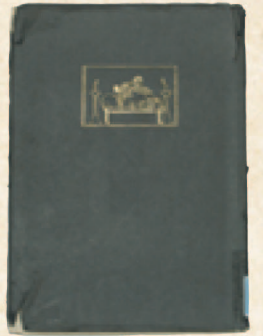


折口信夫・春洋 父子  
(写真提供：國學院大學折口博士記念古代研究所)



右 折口信夫「死者の書」限定本  
(昭和十八年青磁社刊 國學院大學折口博士記念古代研究所蔵)

下 折口信夫「死者の書」続篇「第一稿」  
(同研究所蔵)



二上山、四方遠山  
見渡之圖  
嘉永五年二月廿日



# 越中の二上山

富山県高岡市北部に位置する標高二七四メートルの二上山は、富山平野、立山連峰をはじめ、富山湾や遠く能登半島が一望できる山である。そのため、戦略的にも重要な山とされ、中世から近世にかけて西峰に山城（守山城）が築かれた。山が二つ連なって見えるポイントが少ないのは、山城を築くために削られたからで、天正十三年（一五八五）には、佐々成政を破った前田利長が守山城に入り、これが前田家の越中統治の始まりとなった。現在は城山（守山）と呼ばれて公園となっている。

二上山を廻るように流れる射水川（現在の小矢部川）は、流域に肥沃な大地をもたらし、川筋に沿った山裾には多数の古墳や横穴墓が築造された。天平十八年（七四六）に奈良の都から大伴家持が国守として赴任した越中国庁



は二上山の山裾に、式内社の気多神社と二上射水神社は山麓にある。

家持はこの山をホトトギスの鳴く山としてうたったが、今日でもホトトギスをはじめ、彼が万葉歌で詠んだウグイスやキジなどの多くの野鳥が生息する。

玉くしげ 二上山に鳴く鳥の声の恋しき時は来にけり

〔二上山の賦〕第二反歌 大伴家持 卷十七・三九八七番

二上山に鳴くホトトギスの声の恋しい季節がやってきた



「俳諧多磨比呂飛」の二上山（富山県立図書館蔵）  
編：麦仙城鳥岬 安政3年（1856）刊

「二上山ヨリ四方遠方見渡之図」（金沢市立玉川図書館蔵）  
嘉永5年（1852）4月、加賀藩主前田齊泰が二上山登山の際に、測量家石黒信由によって作成された絵図の写し。二上山山頂からの俯瞰図で、画面の右が氷見方面、左が富山方面。立山・布勢水海など越中万葉の故地の眺望も描かれている。

## 家持の詠んだ二上山の歌の世界

越中国守時代の家持の歌には、「二上山（二上）」という地名は、長歌・短歌を含め八首の歌に登場する。しかし、それはあくまでも歌の中に「二上山」という言葉が含まれる数にすぎない。二上山の麓の国守の任に励み、生活をする家持は、常にこの山の自然を意識して作歌に励んだことであろう。

そうした家持の二上山に関する歌の中で特に注目すべきは、天平十九年（七四七）の旧暦三月三十日に詠まれた「二上山の賦」（卷十七・三九八五〜三七）と呼ばれる長歌とその反歌二首である。春花の盛りの時秋の葉の色づく時と山自体の美しさを叙述すると共に、山を取り囲む環境、射水川が山裾を廻り、渋谿の崎には波が寄せるといったパノラマ的な眺望も表現し、二上山を「神柄やそこば貴き」と聖なる山として崇めている。上の高岡人に親しみのあるホトトギスの歌は、「二上山の賦」の第二反歌である。立夏に鳴くはずのホトトギスの声が聞こえてこなかったため、待ちわびる心情を詠んだのである。このように、山紫水明な山として讚美することは、その麓にある越中国庁を讚めることになり、

その後家持は、この「二上山の賦」を携えて都に上京したと考えられている。任地である越中国庁付近の美しい自然の景観を、都の人々に誇らしげに歌ってみせたのかもしれない。





久保田 大三郎

# 二上山 静謐

ふたがみやま せいひつ  
この山は標高三〇〇メートルにも満たない低山ではあるが、平野部の独立峰のため高岡市内のどこからでも眺められ、市民の山として親しまれている。麓に暮らし日夜この山を仰いでいると、新緑、紅葉、冠雪等々と、季節によって変わるその姿から、生活のリズムが与えられる。

―「二上山静謐」あとがきより―



「二上山日の出」-高岡市岩坪・6月-

二上山と小矢部川、そして日の出の太陽をひとつの画面におさめることができた。

日の出の位置は秋に向かって南に移動してゆき、画面から外れる事になる。

射水川 行き廻れる至くしげ 二上山は  
春花の咲ける盛りに 秋の葉の にはへる時に…

(巻十七・三九八五・大伴家持)

射水川(今の小矢部川)が流れめぐる二上山は、春花の盛りに、秋の葉の色)く時に…



「蒸気霧の朝」-氷見漁港・11月-

氷見漁港で立山連峰からの日の出を待つ。  
この日は海面から盛んに「けあらし」と呼ばれる蒸気霧が湧き、朝焼けの空のもと二上山が霧に浮かんだ。



「桜花水映」-加古川上流・4月-

木々の緑が濃くなる前に咲く山桜は、枝先いっぱい花をつけよく目立つ。  
風の無い朝、静かな水面に姿を映していた。

あしひきの山桜花  
一目だに君とし見てば吾恋ひめやも

(巻十七・三九七〇・大伴家持)  
山の桜を一目だけでもあなたと一緒に見たなら、私はこんなにも恋しく思いましたか。

## くぼた だいさぶろう 久保田 大三郎 略歴

昭和16年生まれ

昭和43年「岳人」写真賞第6回年度賞

昭和44年 全日本山岳写真展入賞

昭和46年 第23回中日写真展運輸大臣賞

昭和47年 第21回国立公園写真コンクール入賞

平成15年 写真集「二上山静謐」(橋本確文堂)刊行 など

「岳人」・「山溪カラーガイド」シリーズ・「日本カメラMOOK」などに作品を発表。山岳撮影のコースガイドも執筆。  
日本山岳写真協会(JAPA)北陸支部事務局長。  
現在、富山県高岡市伏木在住。

### 協力

今回の特別企画展にあたり、多くの方々や機関からご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。(敬称略)

金沢市立玉川図書館・國學院大學折口博士記念古代研究所・富山県立図書館・新湊市博物館・久保田大三郎